

第1巻 記憶なき民〔小説〕(木下誠訳)

船医としてタヒティに滞在した経験をも契機に、初の「小説」として書かれたマオリ民族の失われた歴史。クック来訪以降のマオリ文化の破壊と「文明化」の過程を、ヨーロッパ文化とキリスト教に転向する語り部と抵抗して敗北するその師の物語として語る。マオリの様々な語彙と言ひ回しを交えて語られる前代未聞のこの「小説」は、セガレンの言う「エグゼンティス」の最初の実例である。晩年の不可能な「自伝」の試み「自己自身に関する試論」を付す。

関連書簡——クロード・フレール宛、ダニエル・ド・モンフレッド宛等

第2巻 ゴーガン礼讃／異教の思考〔評論・短編小説・日記〕(丹治恒次郎訳)

ゴーガン論を中心に、マオリ民族論を収録。ゴーガンの死の三カ月後に、その最期をゴーガンの友人らから聴き取って書いた「最後の舞台装置の中でのゴーガン」をはじめ、超人としてのゴーガンをモデルとした未完の中編「享楽の師」、晩年の「ゴーガン礼讃」、さらに、マオリ文化の独自性をマオリ人の碩学とヨーロッパ人の哲学的対話として論じた「異教の思考」、白人文化に抵抗する老人の絶望的かつ英雄的な物語「火の歩み」、マオリ音楽論「死に絶えた声——マオリの音楽」、ポリネシア滞在の記録「島の日記(抄)」を収録。

関連書簡——ダニエル・ド・モンフレッド宛、ジュール・ド・ゴーチエ宛、サン・ボルルー宛等 伝記I

第3巻 二重のランボー／オルフェ王〔評論・中編小説・戯曲〕(木下誠訳)

タヒティからフランスに帰国後、中国に向かうまでの二年間のセガレンの思考の軌跡。文学と旅に引き裂かれたランボーを人格の分裂(ボヴァリスム)の理論によつて論じた「二重のランボー」、聴覚だけの世界に住む二人の男の特異な経験とその男の語る純粋音楽の実践者としてのオルフェの物語を交えた幻想的な中編「響きの世界の中で」、さらに、この小説をきっかけに始まったドリュッシーとの未完の共同オペラ作品のシナリオ「オルフェ王」、「ドリュッシーとの対話」等を収録。

関連書簡——ジュール・ド・ゴーチエ宛、妻(イヴォンヌ・セガレン)宛等

第4巻 天子〔小説〕(黒川修司訳)

十九世紀末、押し寄せる西欧諸国、改革の試み、守旧派との闘争と挫折、西太后による幽閉と身代わりによる政治塾居での孤独な生活、様々な時代の皇帝との幻想の中での体化……歴史に翻弄された光緒帝の人生を、「天」と「地」の媒介者——「天の子」による絶対の探求と多様性の統を求める生の実験として、現実と想像を巧みに交えて描き出す。年鑑記録者による語りという形式によつて、自己の認識の限界を破ろうとする詩人の「エグゼンティス」の実践の成果。

関連書簡——アンリ・マンスロン宛、妻(イヴォンヌ・セガレン)宛等 伝記II

第5巻 ルネ・レイス〔小説〕(黒川修司訳)

清朝末期の北京を舞台にベルギー生まれの謎の青年ルネ・レイスの言動を通じ、紫禁城の内部を探ろうとする日記形式の疑似探偵小説。光緒帝の伝記を書くとして「ぼく」に中国語の家庭教師として雇われ、驚くべき話を次々と語るルネ・レイス。やがて袁世凱の革命軍が蜂起し、彼は逮捕されるが……。北京で出会ったフランス人モーリス・ロワをモデルに、「全知の作者」という物語形式を打ち破る「小説」の実験。「モーリス・ロワ」に基づく秘録を付す。

関連書簡——妻(イヴォンヌ・セガレン)宛

第6巻 碑／頌／チベット〔韻文詩〕(有田忠郎訳)

中国語の縦書きのタイトルと仏語の横書きのテキスト、それら全体を囲む黒い矩形の枠によつても、独自に編み出された韻律法によつても、まったく特異な詩集「碑」。広大な中国に時間を越えて屹立する「石の」碑に抵抗すべく、文字による「碑」によつて独自の中国の「グイジョン」が提出される。文字ではなく「歌」としての詩によつて中国の諸王朝を讀み、さらに中国詩の伝統に則つて散文による注釈が施される「頌」。さらに、未完の詩集「チベット」を収録。

関連書簡——ジャンヌ・ベルドリエル・ウオワシエル宛、アンリ・マンスロン宛、ジュール・ド・ゴーチエ宛等 伝記III

第7巻 絵画／想像のものたち〔散文詩・短編小説・エッセ〕(木下誠訳)

「絵に描かれた小話と語られた絵」とセガレンが形容するまったく新しいジャンルの散文詩集「絵画」。全体が「続きの」香具師の口上」で成り立つこの特異な散文詩は、言葉によつて様々な種類の中国絵画を現出させ、同時にそれらに批評を加えることで、絵画のイメージと意味を無限に増殖させてゆく。言葉と意味とイメージとの関係への深い洞察に満ちた新ジャンルの言語芸術。さらに「短編とエッセ」から成る「想像のものたち」、「神秘的なものに関する試論」などを収録。

関連書簡——妻(イヴォンヌ・セガレン)宛、ジル・ベル・ド・ウオワザン宛、アンリ・マンスロン宛等

第8巻 煉瓦と瓦〔旅日記〕(渡辺諒訳)

一九〇九年八月から一九一〇年一月におよぶ中国内陸部の五千キロ、六カ月にわたる旅の日記。黄河を船で廻り、あるいは数頭の馬で山を越え、さらに船で長江を下りつつ、西安、蘭州、成都、重慶、上海、さらには香港、長崎、神戸、京都、東京……。様々な場所と出来事の記録に加えて、その間に構想された様々な作品の計画、草稿、完結したテキスト、省察なども収めるこの日記は、来るべき作品家の素材(煉瓦と瓦)として、セガレンの作品の謎を解く鍵である。

関連書簡——妻(イヴォンヌ・セガレン)宛等 伝記IV

「セガレン 頌」

——豊崎光一——  
——非・同化の、非・我有化の美学。

ジャン・ボードリヤール

——あらゆる文化の平準化と、それゆえ、旅の不可能性のこのようなエントロピー的宿命がひとたび評定されても、それでもセガレンは「本質的なエグゼンティス」(根源的なエグゼンティス)の思想の進展によつて説明できるだろう。

ジュール・ド・ゴーチエ

——科学的抽象力と激しく格闘する、この揺れ動く芸術的感受性を見ることほど感動的な光景はない。

ジャン・ピエール・リシャル

——細粒化・複数性、非連続性、さらにまた不可侵性、距離のカテゴリーによつて特徴づけられるひとつの世界観。

アンリ・ブイエ

——セガレンは、ジョルジュ・ド・ラ・トゥール、フェルメール、ネルヴァルといった、時とともに輝きを増し、ついに最高の位置を占めてしまう秘密の芸術集団に属している。

ジョルジオ・アガンベン

——セガレンのエグゼンティスムは、作品に生の見せかけを与えるために外部から付け加えられる装飾であるところか、ほかならぬ文学的な語り(パロール)の本質的なドラマを秘めている。あらゆる文学的な語りは、必然的にエグゼンティックである。

エドゥアール・グリッサン

——セガレンの「多様なもの」の(美学)としての「エグゼンティスム」は、狭い異国的・歴史的的局面という根株を取り払った理論であり、詩を完全なものにする味わい深い偶然の出来事を何つ変質させずに可能にするものである。

victor segalen